

- 1 派遣期日 令和4年11月4日(金)
 2 派遣先 学校名 北海道教育大学附属函館中学校(オンライン)
 所在地 北海道函館市美原3-48-6
https://www.hokkyodai.ac.jp/fuzoku_hak_chu/

3 研修内容

(1) 研究主題

1人1台端末環境における、指導と評価の一体化
 ～CBTを活用した学習評価の在り方～

北海道教育大学附属函館中学校は、2022年度「国立教育政策研究所委託事業 CBT の学力調査協力校(国語・理科)」を担っている。平成25年度よりタブレット端末の持ち帰りが始まり、令和2年度には遠隔教育システムの効果的な活用に関する実証を行うなど、これまで様々なICTの利活用に取り組んでいる。

1人1台端末を、学習成果物の作成に留めず、育成したい資質・能力の総括的評価を行うためにはどのような方法や可能性があるのかを探っていくことが、研究の中心となっている。

(2) 研究主題に関する全体会

① 1人1台端末の利活用の実際

これまでの利活用法	課題
・学習成果物の作成。	・生徒が単元のまとまりの中で、学習改善に用いることができない。 ・教員が自らの指導を振り返り、成果物を次の指導に生かすことが難しい。
↓	
目指す利活用法	
① 単元や題材の指導の途中で評価を行うこと ② 実施された評価が生徒に即時返却され、自らの学習につなげること ③ 生徒の取組としてのデータが蓄積でき、それらを分析すること	

② CBT(Computer based testing)評価の実際

CBT評価とは、コンピューターを用いてテストを行うことである。簡易的なものでは、Microsoft Forms や、Google フォームを活用した小テストなどが挙げられる。

これまでの利活用法	課題
・短答式の設定が多い。 ・知識・技能を見取るものが多い。 ・単発的に実施されている。	・生徒が学習の中で身に付けた資質・能力を見取るものになっていない。 ・指導と評価の一体化が行えていない。

CBT の利点

- CBT の特性を生かした新しい問題が導入できる点
- 解答から、生徒のつまずきなど、多面的な分析が可能な点
- 選択式問題については自動採点が可能な点
- 調査後、速やかに結果や集計結果を生徒へ提供、フィードバックが可能な点

③ 定期テストに CBT を取り入れた事例

数学科で CBT を定期テストに取り入れた実践を行った結果、活用するにはデメリットがメリットよりも多いことが挙げられた。得に CBT と PBT (Paper based testing) を同時に行うと机上のスペースに余裕がなくなる、ネットワークの接続が安定しないなどの環境要因は一朝一夕には解決しない。一方で、即時採点ができる間に関しては、誤った問題をその場で復習でき、関連する間の誤りが減るというメリットも挙げられた。知識・技能を問う CBT は一定の成果が出ているが、思考力・判断力・表現力を問う活用法については、その可能性を探っている段階である。

(3) 教科別研修

① 「CBT となじみやすい」単元の精選について

国語科における 1 人 1 台端末の活用は、書く活動などにおける成果物作成が予想される。また、知識・技能を問うための CBT は、短答式のクイズ等で生徒の知識の定具合を見取ることができる。すると、歴史的仮名遣いや、古典特有の用語を学習する古典の単元が知識定着で CBT を活用しつつ、活用の可能性を探ることができると考え、教科別研修会では、「おくのほそ道」を取り上げ、実践を行っていた。

② 単元を通しての ICT 活用例

導入として、NHKforSchool の「おくのほそ道」を視聴し、作品の全体像を把握する活動を行っていた。その際には、ドキュメントシートにメモを取りながら視聴することで、生徒がどのような点に着目したか、情報をどのように整理したのかを見取っていた。

毎時間の授業では Google フォームでの歴史的仮名遣いの問題や、古文と口語訳を照らし合わせることができているかを確認する問題を行っていた。短答式の CBT では即時採点がされ、生徒が、誤りをその場で確認できるという利点がある。間違えた問題に出会った時が、生徒の学ぶチャンスになる。これは CBT の最大の利点である。更に、生徒の回答状況が即時で集計されるため、つまずきが見られる生徒への個別支援も授業内に行うことができていた。生徒の評価が次時の指導の改善に生きる分かりやすい活用例であった。

古文の音読テストの際にも、各自録画したデータを提出し、評価していた。今までは、授業中に一人一人取り出しテストをしていたため、テストを受けている生徒以外の生徒の待ち時間が生じてしまっていたが、それが解消されるのがメリットである。

4 感想

(1) 全体会、講話について

1 人 1 台端末の活用が、成果物作成に偏ってしまう点について、自分でも、日頃から悩ましく感じていたため、CBT を学習評価に活用するという視点は、解決の糸口となったように感じた。何よりも、ICT 活用に苦手意識がある教員であっても、簡単な操作で活用できる授業実践の提案が素晴らしかった。生徒の実態や、ICT の整備環境にもよらずに明日にでも自校で活用できるという点が魅力的であった。2 年に渡る研究ということなので、来年もぜひ参加したい。

(2) 教科別研修会について

教科別研修会の意見交換の場でも、思考力・判断力・表現力を高めるための、CBT 活用や評価への生かし方について試行錯誤している現状が議論されていた。今後は生徒の思考の過程や、表現の吟味の過程を可視化できるように研究がなされていくとのことであったが、ICT 活用が、生徒の学びをより良いものにする一方で、丁寧な評価を可能にするあまり、授業者の負担を増すのではないかという点も懸念されると感じた。